

二〇二三年度

Sr. マリア・マダレナ江角特待生選抜 入学試験問題

## 適性検査型Ⅰ（五十分）（全四ページ）

### 〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 解答用紙は二枚です。試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

次の文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

## 文章1

(\*印のついている言葉には本文のあとに「注」があります。)

今、対話とは何かと考えると、どのように説明できるでしょうか。

とても簡単に言えば、「相手と話すこと」ということになるのでしょうか。

しかし、一方的に相手に話しかけても、その相手がこちらの言っていることに耳を傾けてくれるかどうかは、だれも保証できません。

相手の目をしっかりと見て、きちんと語りかけること、巷\*ちまたの話し方講座等ではこんなアドバイスがあるかもしれません。そのとき、しばしば出るのは、「思ったことを感じるままに話してはダメだ」という意見ですね。思ったことを感じるままに話すと、お互いたがに感情的になってしまい、解決すべきことがなかなかうまく運ばない等々。

しかし、「思ったことを感じるままに話す」ことそれ自体が悪いことだとは、私は決して思いません。むしろ「思ったことを感じるままに話すべき」であるときえ思うほどです。

ただ一つ、思ったことを感じるままに話すと、それがおしゃべりになってしまふという大きな課題があります。

ここでいう「おしゃべり」とは、相手に話しているように見えながら、実際は、相手のことを考えない活動だからです。少しむずかしくいうと、他者不在の言語活動なのです。

でも、相手があつて話をしているのだから、他者不在とは言えないのではない

いかという質問も出そうですね。

たしかに、おしゃべりをしているときは、相手に向かって話しかけてはいませんが、ほとんどの場合、何らかの答えや返事を求めて話しているのではなく、ただ自分の知っている情報を独りよがり\*ひとに話しているだけではないでしょうか。そこでは、他者としての相手の存在をほぼ無視してしゃべっているわけです。

だからこそ、思ったことを感じるままに話すことには注意が必要なのです。

「あのことが、うれしい、悲しい、好きだ、嫌いだ」というように、自分の感覚や感情をそのままことばにして話していても、相手は、「へえー、そうですか」と相槌\*あいつちを打つだけ。今度は相手も自分の思いを語りはじめ、それぞれに感じていることや思っていることを吐き出はすと、お互いたがなんだかすつきりして、なんとなく満足する。こういうストレス発散の点では、おしゃべりもそれなりの効果をもっています。その次の段階にはなかなか進めません。

このように、いわゆるおしゃべりの多くは、かなり自己完結的な世界の話です。そのままで、それ以上の発展性がないのです。その意味では、おしゃべりは、相手に向かって話しているように見えても、実際は、モノローグ(独り言)に近いわけでしょう。表面的には、ある程度、やりとりは進むように見えますが、それは、対話として成立しません。ここにモノローグであるおしゃべりとダイアログとしての対話の大きな違いがあるといえます。

ちよつと余談\*よだんになりますが、カルチャーセンターの講演会や大学の講義などでも、こうしたモノローグはよく見られます。本来、聴衆ちゆうしゆや学生に語りかけているはずなのだけれど、実際は、自分の関心事だけを自己満足的にとらう

と話している、これはまさにモノログの世界ですね。

これに対して、ダイアログとしての対話は、常に他者としての相手を想定したもののなのです。自分の言っていることが相手に伝わるか、伝わらないか、どうすれば伝わるか、なぜ伝わらないのか、そうしたことを常に考え続け、相手に伝えるための最大限の努力をする、その手続きのプロセスが対話にはあります。

対話成立のポイントはむしろ、話題に関する他者の存在の有無なのではないかとわたしは考えます。実際のやりとりには他者がいるかどうかだけではなく、話題そのものについても「他者がいる話題」と「いない話題」があるということなのです。つまり、その話題は、他者にとつてどのような意味を持つかということが対話の進展には重要だということです。

したがって、ダイアログとしての対話行為は、モノログのおしやべりを超えて、他者存在としての相手の領域に大きく踏み込む行為なのです。

言い換えれば、一つの話題をめぐって異なる立場の他者に納得してもらうために語るといふ行為だともいえますし、ことばによつて他者を促し交渉を重ねながら少しずつ前にすすむという行為、すなわち、人間ならだれにでも日常生活や仕事で必要な相互関係構築のためのことばの活動だといえるでしょう。

(細川英雄「対話をデザインする」による)

## 【注】

巷ちまた —— 世の中。世間。ある物事が行われている場所。  
独りよがりひと —— 他人の意見などは聞かずに、自分だけでよい  
と思ひこんでいること。

相槌あいづち —— 相手の話に調子を合わせて受け答えをすること。

余談よだん —— 本筋からそれた話。

想定そうてい —— ある状況・条件などを仮に考えてみること。

## 文章2

スマートフォンやいわゆるガラケー上で行われるやりとりには、ユニークな特徴がある。携帯電話などのデジタル機器で「打って」使われることから、SNSやメールで使われる文字ことばを「打ちことば」などといったりする。英語ではテキストやテキスト・スピークと呼ばれる。

打ちことばの特徴としては、まず一般的に短いことが挙げられる。TwitterなどSNSの中には、そもそも打てる文字数に制限が課せられているものもある。LINEなどインスタント・メッセージ(IM)と呼ばれる同期性のもので、つまり送信したものが同時に受信されるものではない、あたかも話をしているかのような特徴が出てくる。話ことばを「見える化」したものだといつてもいいだろう。その他、短時間で効率よくメッセージを発するための簡略化など、さまざまな工夫が凝らされている。打ちことばには、いわゆる慣用的な語彙、綴り、表記方法、文法等から逸脱したような言語使用が観察される。

視覚的な可愛さや感情表現に関しては、日本語の打ちことばは、英語のテキスト・スピークと比較すると、非常にバラエティーに富んでおり、使用頻度も高い。日本語では絵文字の種類も多い。日本の絵文字はいまや emoji として国際的に使用されるようになったが、絵文字と emoji は違うという。海外の emoji は具体的に描かれており、意味が明確であることが多い。つまり、個々の emoji の持つ意味は固定化している。一方、日本の絵文字は、シンプルな線や絵からできていることが多く、そのシンプルさのゆえ、意味をあいまいにする。逆にいうと、その意味のあいまいさの故に、かえって汎用性が高く、感情表現や、

微妙なニュアンスなどに有効に使われているのだという。

意味のあいまいさは、日本のデジタル世代に人気の「田」で使われるスタンプにもあてはまるという。スタンプはメッセージ性が高い。「田」上のやりとりをみると、文字なしでスタンプだけでやりとりが行われたりすることもよくある。ただ、何を表しているのか、よくわからないスタンプも少なくない。絵文字と同様、スタンプの持つ「意味のあいまいさ」のゆえに、多様な意図をもって使うことができる。スタンプは句読点の代わりに使われたり、トピック変換の目印や、会話終了の合図など、幅広い用途で使われている。その結果、句読点などのルールが非常に多様化しているのも事実である。意味のあいまいなものを、いろんなコンテキストで使いまわす方法は、読み手への依存度が高く、言語情報よりも文脈情報を優先する、日本語のコミュニケーションの特徴をよく表しているのだといえる。

(バトラー後藤裕子「デジタルで変わる子どもたち」による)

### 【注】

- 簡略化 — 細部をはずいて簡単にすること。
- 慣用的な — 習慣として使い慣れている。
- 語彙 — ある人やある国の単語のすべて。
- 逸脱 — 本筋からそれること。
- 汎用性 — 一つのを広くいろいろな方面に用いること。

ニュアンス ——— 言葉などの微妙な意味合い。言外に表された

話し手の意図。

用途ようと ——— 使い道。

コンテキスト ——— 言語が使用される場面や、文章内部の前後の

つながり、文脈。

依存度いぞんど ——— 相手にたよる度合い。

〔問題3〕

「打ちことば」による「ダイアログ」は、他者を幸せにすることができると思いますか。文章1と文章2をふまえて、自分の考えを四百字以上五百字以内で書きなさい。ただし、あとの〈手順〉と〈きまり〉にしたがうこと。

〈手順〉

1 他者を幸せにすることができるか、できないか、自分の考えを述べる。

2 他者を幸せにできる（またはできない）理由を述べる。

3 日々の生活の中で、他者を幸せにするためには何が必要か、自分の意見を書く。

〈きまり〉

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○ 〃や。や「なども、それぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）

○ 。と「が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「。で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

〔問題1〕

文章1に「モノログであるおしゃべりとダイアログとしての対話の大きな違い」とありますが、筆者はどのような違いだと述べていますか。解答らんに合うようにそれぞれ十字以上二十字以内で答えなさい。なお、〃や。や「なども、それぞれ字数に数え、一ますめから書き始めること。

〔問題2〕

文章2に「日本語のコミュニケーションの特徴」とありますが、筆者はどのようなことだと述べていますか。四十字以上五十五字以内で説明しなさい。なお、〃や。や「なども、それぞれ字数に数え、一ますめから書き始めること。